

多賀城市文化財調査報告書第84集

多賀城市内の遺跡 1

— 平成16年度発掘調査報告書 —

平成18年3月

多賀城市教育委員会

例 言

1. 本書は、平成16年度の市単独事業で実施した7件の調査成果をまとめたものである。
2. 遺構の名称は第1次調査からの連番号である。
3. 測量法の改正により、平成14年4月1日から経緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書中の各調査区で使用した座標値は、過去の調査区との整合性を図るため、従来の国土座標「平面直角座標系X」を用いている。なお、山王遺跡第46次調査の調査区基準線については、X：-189,200、Y：13,850（南北・東西大路交差点の中央付近）の交点を東西・南北の原点とし、1m離れるごとに、東西方向は東にE1・E2・・・、西にW1・W2・・・、南北方向は北にN1・N2・・・、南にS1・S2・・・と表示している。
4. 挿図中の高さは標高値を示している。
5. 土色は『新版標準土色帖』（小山・竹原：1996）を使用した。
6. 本書の執筆は、調査員全員の協議のもとに、I-3・4、V・VIを相澤清利、III・VII・VIIIを千葉孝弥、IVを島田敬、I-1・2・5、IIを鈴木孝行が担当した。また、編集は鈴木が行った。
7. 調査に関する諸記録および出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

目 次

I. 遺跡の地理的・歴史的環境…………… 1	V. 新田遺跡第31次調査……………14
II. 山王遺跡第46次調査…………… 3	VI. 高崎遺跡第45次調査……………16
III. 山王遺跡第48次調査…………… 9	VII. 高崎遺跡第46次調査……………17
IV. 市川橋遺跡第49次調査……………11	VIII. 桜井館跡第1次調査……………18

調 査 要 項

- | | | |
|----------|---|-----------|
| 1. 調査主体 | 多賀城市教育委員会 | 教育長 菊地 昭吾 |
| 2. 調査担当 | 多賀城市埋蔵文化財調査センター | 所 長 佐藤 慶輝 |
| 3. 調査協力者 | 平山建治・知子 相澤宏光 熊谷学 熊谷敏明 宗教法人化度寺 有限会社重裕商事
有限会社長尾設備 大木建設株式会社 | |
| 4. 調査従事者 | 赤間かつ子 大場勝喜 小野寺恵子 小幡 武 南城美岐子 平山節子 藤澤拓司
宮下喜代平 | |
| 5. 整理従事者 | 遠藤友美 中村千恵子 横山佳織 村上和恵 | |

凡 例

1. 遺構略称

本書中で使用する遺構略称については、以下のとおりである。

S I：竪穴住居 SD：溝 SK：土壇 Pit(P)：柱穴及び小穴 SX：道路、河川及び性格不明な遺構

2. 本文中で記載する「灰白色火山灰」については、その起源を宮城県北西部に求める説（山田・庄子：1980）と十和田a火山灰と同一とする説（町田ほか：1987、阿子島・壇原：1991）があるが、近年は後者の説が有力である。この火山灰の降下年代については、年輪年代測定で907年とされた秋田県弘田柵跡外郭線C期角材列存続期間中に降灰し、承平4年（934）閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間と考える立場（多賀城跡調査研究所：1998）と、『扶桑略記』延喜15年（915）7月13日条にみえる「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ、915年とする説（町田ほか：1981、阿子島・壇原：1991）があるが、本書では考古学的な見解を重視し前者に従った。

I. 遺跡の地理的・歴史的環境

1. 山王遺跡

本遺跡は、市西部を北西から南東方向に流れる七北田川と市中央部を流れる砂押川に挟まれた、標高3～4mの微高地上に立地し、東西約2km、南北約1kmの広さを有する。同じ微高地上には、西側に隣接して新田遺跡、砂押川を隔てた東側に市川橋遺跡が所在しており、大規模な遺跡群を形成している。

本遺跡については、これまで多くの調査が行われており、弥生時代中期頃の水田跡や古墳時代前期の水田跡、古墳時代中期～後期の集落跡、奈良・平安時代の建物跡や道路跡が発見されている。このうち、8世紀後葉から10世紀にかけては、東に隣接する市川橋遺跡とともに道路による方格地割が形成されていることが判明している。特に、幹線道路である東西大路は本遺跡中央部を横断し、それに面した場所では国司クラスの邸宅が発見されている。近年の成果では、東西大路沿いには国司クラスの邸宅、大路より一区画離れた場所には中・下級役人の住まいが設けられるなど、階級による土地の選定が行われていたことも判明している。

2. 市川橋遺跡

本遺跡は、市中央部を流れる砂押川東岸に形成された、標高2～3mの微高地上に立地し、東西約1.4km、南北約1.6kmの広さを有する。北東側に接する低丘陵上には、奈良・平安時代を通して陸奥国府が置かれた特別史跡多賀城跡があり、これと密接に関係する古代の遺跡として知られている。

本遺跡については、これまで多くの調査が実施され貴重な成果を得ているが、特に注目されるのが多賀城南面に施工された古代の方格地割の発見である。これは、城外の二大幹線道路である南北大路と東西大路を基準とする南北・東西の道路によっておおよそ1町を基準とした地割を形成するものであり、その範囲は西側に隣接する山王遺跡にまで及んでいる。本遺跡中央部はこの幹線道路の交差点にあたり、周辺では規則的に配置された大規模な建物や四面庇付建物が発見されるなど、城外でも最も重要な地域であると考えられる。

3. 新田遺跡

本遺跡は、市西部を北西から南東方向に貫流する七北田川東岸に形成された、標高5～6mの微高地上に立地し、東西約0.8km、南北約1.6kmの広さを有する。縄文時代から中世にかけての遺跡として知られているが、特に中世では、溝で区画された屋敷跡が多数発見されている。このうち、遺跡東部にあたる寿福寺地区では、12世紀後半から16世紀にかけて連続して屋敷群が形成されていたことが明らかとなり、出土遺物から上級武士の屋敷と考えられている。近年の調査では、この屋敷群がさらに南の北地区まで広がりを持つことが明らかになってきている。西側に隣接する仙台市宮城野区岩切から本遺跡一帯は、留守氏が支配する「高用名」に含まれる地域であることから、これら武士層は留守氏と深く関係のあるものと想定されている。

4. 高崎遺跡

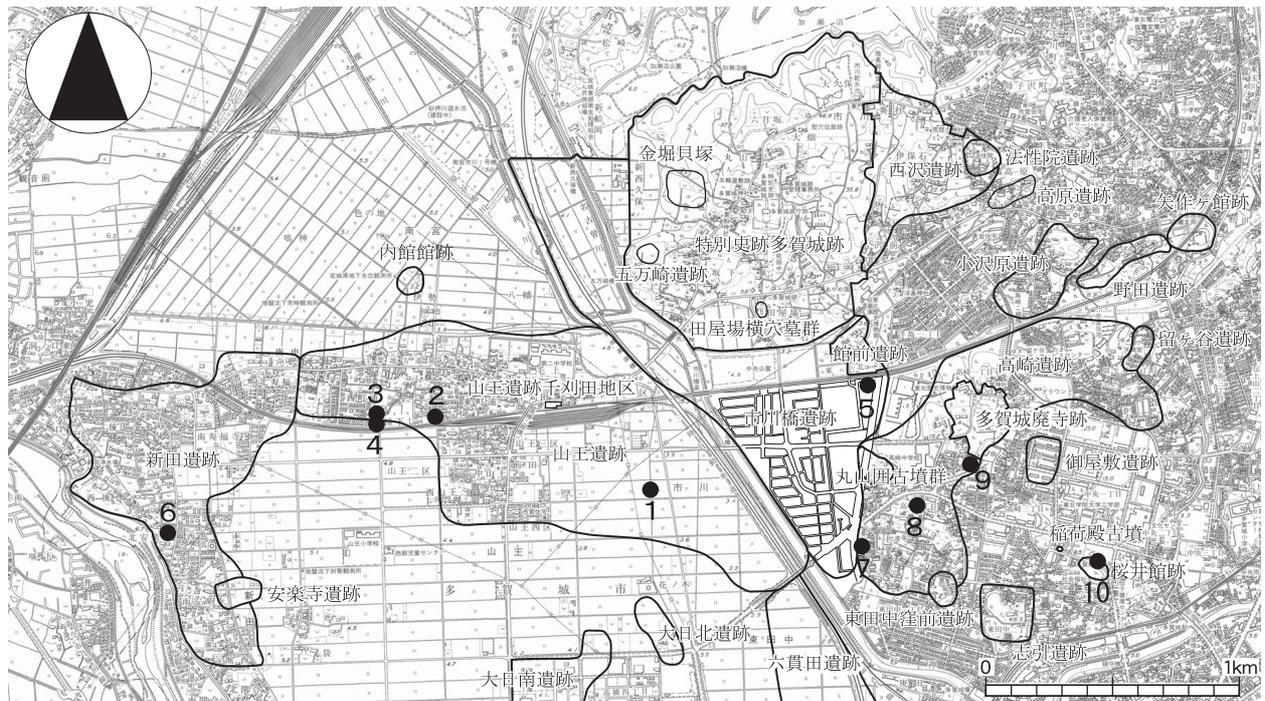
本遺跡は、市の東半部を占める標高30m以下の低丘陵西端部に位置し、特別史跡多賀城廃寺跡を取り込むように、東西約1.2km、南北約1.1kmの範囲に広がっている。この丘陵は、塩竈方面から本市北東部に至り、南側及び西側の沖積地に向かって枝状に派生している。このため、大小の谷が複雑に入り組んだ、起

伏に富んだ地形を呈している。

本遺跡については、これまで多くの調査が実施されており、古墳時代から近世の遺構・遺物が発見されている。多賀城廃寺跡の南西200mに位置する弥勒地区では、掘立柱建物跡や竪穴住居跡が多数発見されており、出土した遺物（鉄製匙等）から多賀城や多賀城廃寺との関連が指摘されている。また、井戸尻地区では1,000個体を超す多量の灯明皿が一括廃棄されており、周辺で万灯会などの仏教儀式が執り行われていたと考えられている。

5. 桜井館跡

本遺跡は、多賀城市役所の西側に所在し、松島丘陵から南に派生する低丘陵の南端部に立地している。中世の館跡として登録されている遺跡であり、東西110m、南北80mの広さを有する。現在でも東西80m、南北40mの平場、その北側に腰郭、西側に続く丘陵との間には幅約8m、深さ約2mの堀切や土塁状の高まりが明瞭に残っている。安永三年に作成された留ヶ谷村の風土記御用書出には、「古館」として田中村との境に「桜井館 竪三十間 横十五間」と記載されている。これまで発掘調査が行われておらず、年代や構造については明らかではない。



No.	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員
1	山王遺跡第46次調査	山王字山王四区、市川字多賀前	平成16年12月6日～14日	53㎡	鈴木孝行、大友貴晴
2	山王遺跡第47次調査	山王字東町浦	平成17年2月3日	9㎡	千葉孝弥
3	山王遺跡第48次調査	山王字西町浦82	平成17年2月7日	1㎡	千葉
4	山王遺跡第49次調査	山王字三千刈25-1・掃下1-1	平成17年3月23日	169㎡	武田健市、村松稔、相澤正信、大友
5	市川橋遺跡第49次調査	城南一丁目	平成16年7月28日	90㎡	島田敬
6	新田遺跡第31次調査	新田字西2-11	平成16年11月29日	25㎡	相澤清利、岩永知子、大友
7	高崎遺跡第45次調査	高崎二丁目6	平成16年5月19日	8㎡	相澤(清)、大友
8	高崎遺跡第46次調査	高崎二丁目57-2	平成16年11月10日～22日	104㎡	千葉、岩永
9	高崎遺跡第47次調査	高崎二丁目194・195・196・197	平成17年3月25日～4月1日	97㎡	千葉、大友
10	桜井館跡	中央一丁目	平成16年7月28・29、8月5日	30㎡	千葉

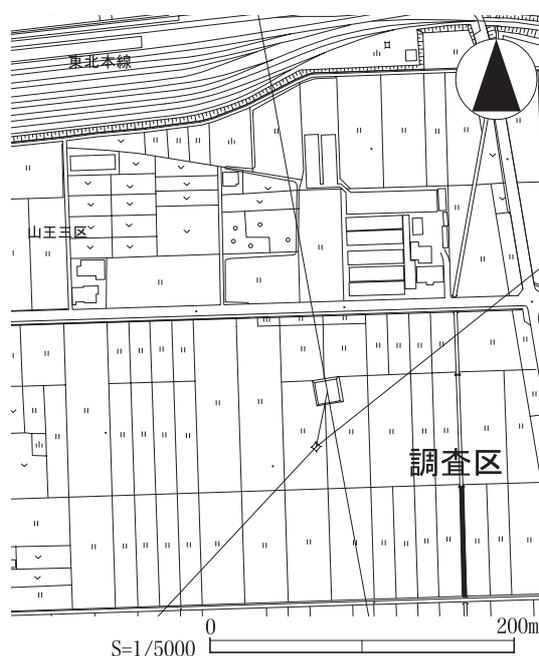
第1図 調査地の位置

Ⅱ. 山王遺跡第46次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、加瀬用排水路整備事業に伴う発掘調査である。平成16年10月に当市下水道課より協議があり、既存の水路部分での整備工事であり遺跡にあたる影響は軽微であると考えられることから工事立会で対処する旨を回答した。平成16年12月6日に立会調査を実施した結果、多賀城と密接に関係する遺構が多数確認されたため、本発掘調査として実施するに至った。

調査は立会調査終了後の12月7日から開始し、竪穴住居跡、溝跡、土壇などを多数検出した。8日からは検出した遺構の全景写真撮影を行い、その後北半部で検出した溝跡の掘り下げ作業を開始した。9日には遺構平面図の作成を行い、10日からは竪穴住居跡をはじめとする遺構の調査を開始した。14日には完掘状況の写真撮影を行い、一切の調査が終了した。



第1図 調査区の位置

2. 調査成果

(1) 層序

今回の調査で確認された層序は以下のとおりである。

I層：現代の水田耕作土層で、厚さは10～20cm。

II層：調査区北半のSD1212・SD1214上面にのみ確認できる黒色粘質土層で、厚さは10cm前後。なお、このような土層は、多賀城外で確認された道路跡の最上層で検出されたものと近似している。

III層：黄褐色砂質土及び灰黄褐色粘質土で、古代の遺構検出面である。

(2) 発見遺構と遺物

発見した遺構には、竪穴住居跡、溝跡、土壇などがある。調査区は幅が0.5～1mと狭かったため、遺構の全容がつかめたものがほとんどない（註）。ここでは、その中でも比較的内容のわかるものについてのみ記述する。

S I 1217竪穴住居跡

調査区中央部のIII層上面で発見した竪穴住居跡である。検出した段階で既に床面は残存せず、掘り方埋土及び周溝を検出したのみである。SD1218と重複し、これよりも新しい。規模は南北3.3mである。方向は南辺の周溝でみると、東で約17度北に偏している。遺物は、周溝埋土より非クロ調整の土師器杯が出土している。

S I 1220竪穴住居跡

調査区南半部のIII層上面で発見した竪穴住居跡である。既に床面が露出した状態で検出した。貼床から3時期の変遷（A→C期）を確認した。SK1213と重複し、これよりも古い。規模はC期が南北2.6m、A

期が南北1.8mである。方向は南辺でみると、東で約2度北に偏する。遺物は土師器甕片が出土している。

SD1212溝跡

調査区北端のⅢ層上面で発見した東西方向の溝跡である。SD1215・1216と重複し、これよりも新しい。規模は上幅9.8m以上、深さ45cmである。埋土は2層に分けられ、1層が黒褐色粘質土、2層が褐灰色粘質土である。遺物はロクロ調整の土師器杯・甕、須恵器杯・甕、須恵系土器が出土している。

SD1214溝跡

調査区北半部のⅢ層上面で発見した東西溝跡である。3時期の変遷（A→C期）を確認した。他の遺構との重複はない。規模は、A期が上幅4.1m、深さ75cm、B期が上幅1.5m、下幅1.0m、深さ95cm、C期が上幅3.9m、下幅1.8m、深さ48cmである。断面形は、A・C期が皿状、B期が逆台形状である。埋土についてみると、A期は3層に分けられ、上から順に褐灰色粘質土、黒褐色粘質土、暗灰黄色砂質土、B期は2層に分けられ、上から順に灰白色火山灰ブロックを含む黒褐色粘質土、地山ブロックを含む黒褐色粘質土であり、C期は黒褐色粘質土である。遺物はC期埋土より、ロクロ調整の土師器杯・甕、須恵器杯・甕、碗形の焼台の痕跡がある須恵器瓶が出土している。

SD1215溝跡

調査区北半部のⅢ層上面で発見した東西溝跡である。SX1226、SD1212と重複し、前者よりも新しいが後者よりも古い。規模は、上幅3.6m以上、下幅3.3m以上、深さ38cmである。断面形は皿状であり、埋土は炭化物を多量に含む黒褐色粘質土である。遺物は、土師器杯（ロクロ調整・回転ヘラケズリ調整）・土師器甕（ロクロ調整）、須恵器杯（回転糸切り・ヘラ切り）・甕、墨書土器、ヘラ書き土器が出土している。

SD1218溝跡

調査区中央部のⅢ層上面で発見した南北溝跡である。SI1217と重複し、これよりも古い。規模は、上幅1.1m、下幅0.5m、深さ40cmである。断面形は逆台形状を呈し、埋土は灰黄褐色砂質土である。遺物は出土していない。

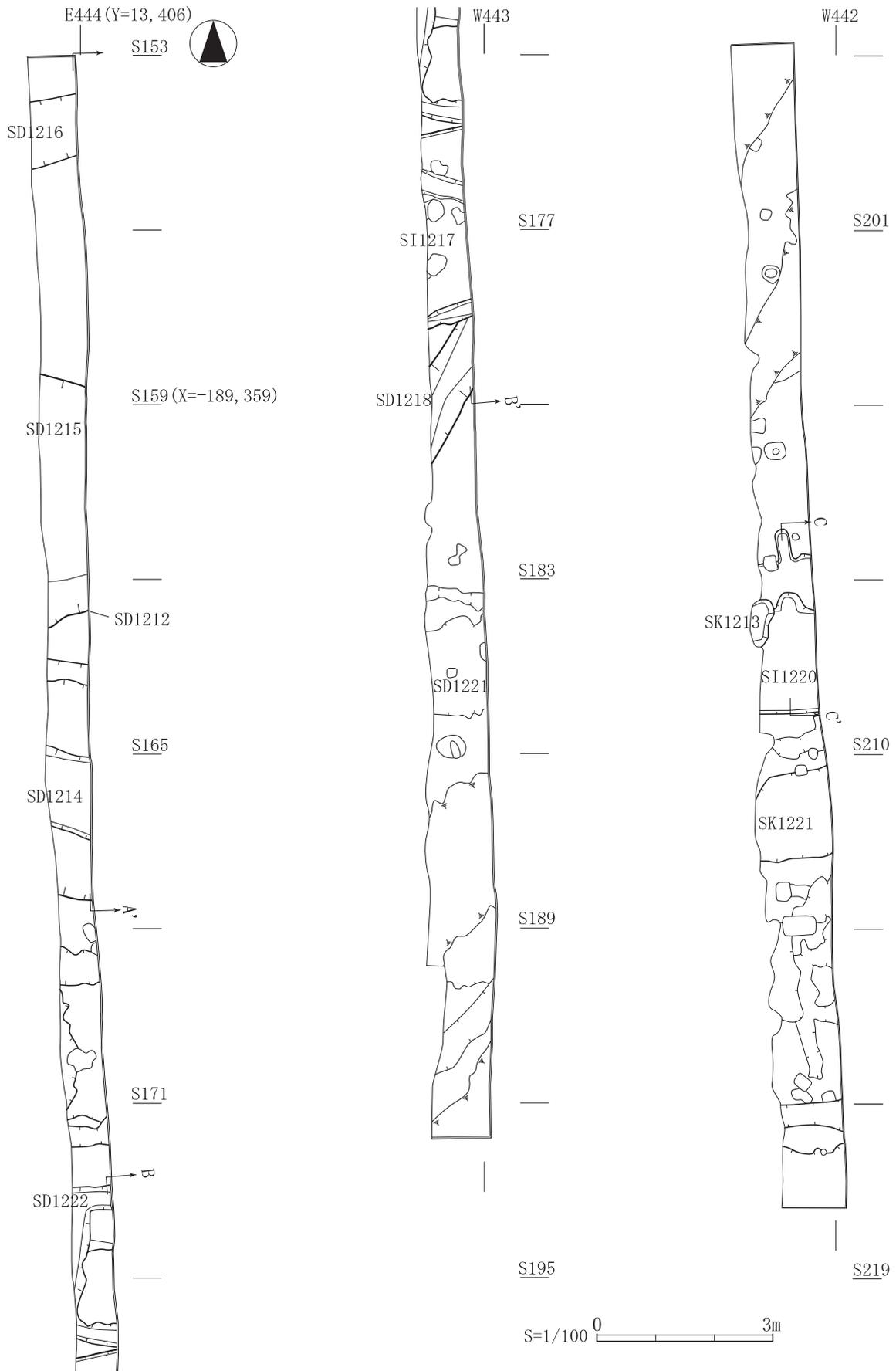
SK1221土壌

調査区南端部のⅢ層上面で発見した土壌である。規模は南北1.5m、深さ13cmである。断面は皿状を呈し、埋土は炭化物を含む黒褐色粘質土である。遺物は、土師器杯（回転糸切り）・土師器甕（ロクロ調整）、須恵器杯・甕・瓶が出土している。

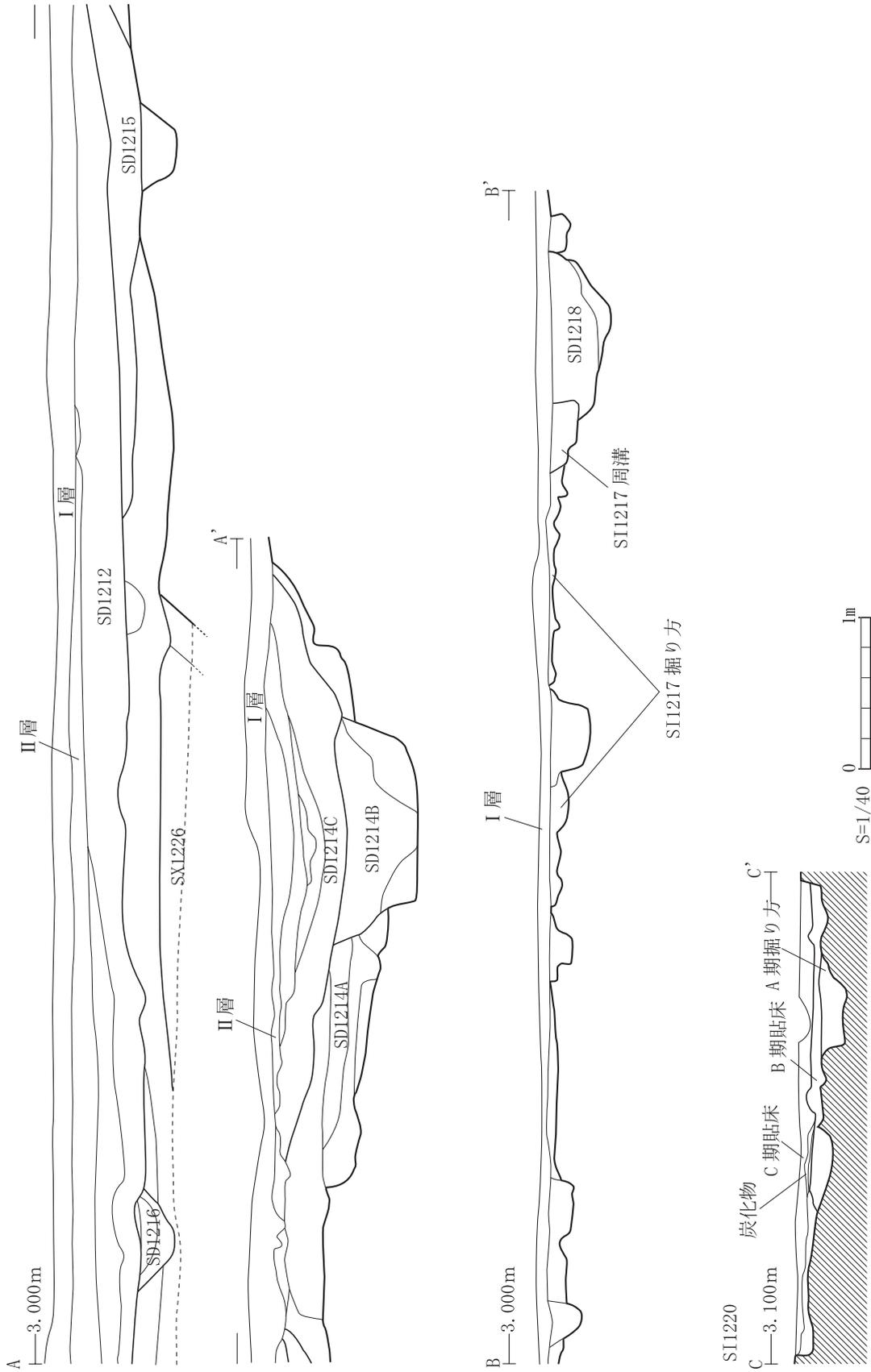
3. まとめ

- (1) 今回の調査では、竪穴住居跡、溝跡、土壌などを発見した。
- (2) 遺構の年代についてみると、SI1217は周溝埋土より平底の非ロクロ調整の土師器杯が出土していることから概ね8世紀中葉頃と考えたい。北半部のSD1212については火山灰との関係から10世紀前葉以降であり、SD1214は火山灰降下前後に機能していたと考えられることから、9世紀後葉から10世紀にかけてのものと考えられる。SD1215についても出土遺物から概ね9世紀代のものと考えておきたい。

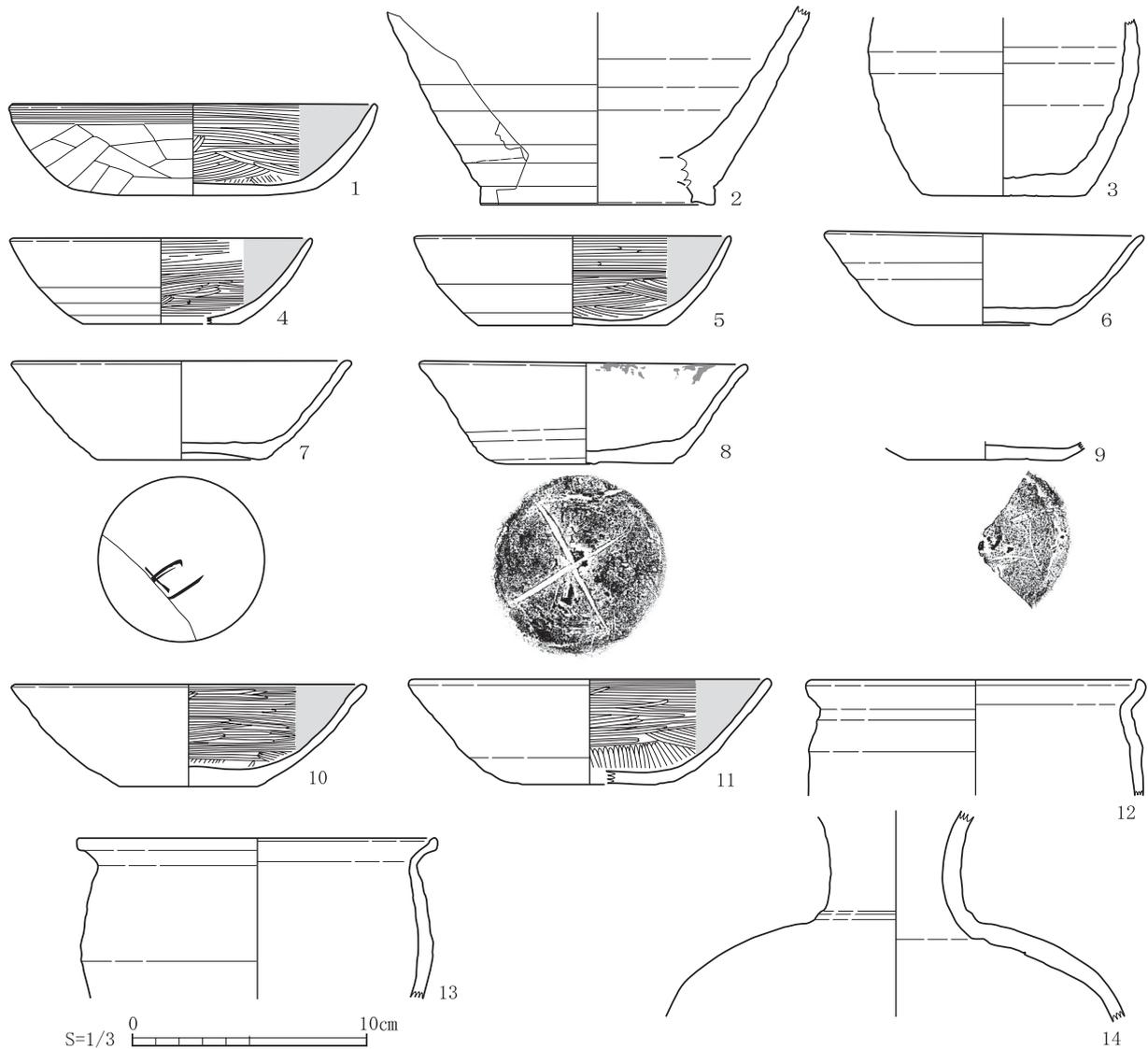
(註) 北半部において並行して検出したSD1212・1214溝跡は、同時性が認められること、山王遺跡第36次調査で検出された南1道路から105m南に位置することなどから東西道路跡（南2道路または南1-2間道路）の可能性が考えられるが、調査区が狭いこともあり断定には至らなかった。ここでは、それぞれ溝跡として報告する。



第 2 図 遺構全体図



第3図 主要遺構断面図



単位：cm

番号	種類	遺構・層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	備考
			外面	内面					
1	土師器・杯	SI1217・周溝埋土	ヨコナデ 手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	(15.6) 3/8	10.0 1/2	3.9	R42	
2	須恵器・瓶	SD1214C	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ	—	9.9 1/8	—	R17	体部下端に焼台痕
3	土師器・甕	SD1215・2層	ロクロナデ	ロクロナデ	—	7.0 1/2	—	R2	
4	土師器・杯	SD1215・2層	ロクロナデ→回転ヘラケ ズリ	ヘラミガキ 黒色処理	(13.4) 3/8	8.0 1/2	3.8	R4	
5	土師器・杯	SD1215・1層	ロクロナデ→回転ヘラケ ズリ	ヘラミガキ 黒色処理	(12.8) 5/24	(6.6) 1/8	3.8	R7	
6	須恵器・杯	SD1215・2層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	13.5 2/3	5.8 1/1	4.0	R5	
7	須恵器・杯	SD1215・1層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(14.5) 5/24	7.1 5/8	4.3	R3	底部外面に墨書「□」
8	須恵器・杯	SD1215・2層	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	14.0 2/3	7.4 1/1	4.5	R1	内面に油煙付着 底部外面にヘラ書き「×」
9	須恵器・杯	SD1215・1層	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	—	(6.5) 1/3	—	R9	底部外面にヘラ書き「人」
10	土師器・杯	SK1221・1層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ヘラミガキ 黒色処理	(15.0) 1/3	5.8 1/1	4.4	R43	
11	土師器・杯	SK1221・1層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ヘラミガキ 黒色処理	(15.3) 11/24	(5.6) 3/8	4.5	R44	
12	土師器・甕	SK1221・1層	ロクロナデ	ロクロナデ	(14.3) 1/3	—	—	R37	口縁部にスス付着
13	土師器・甕	SK1221・1層	ロクロナデ	ロクロナデ	(15.2) 5/12	—	—	R40	外面にスス付着
14	須恵器・長頸瓶	SK1221・1層	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	—	R46	三段構成

第4図 出土遺物実測図



調査区全景 北より



S I 1220検出状況 南東より

Ⅲ. 山王遺跡第48次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、山王遺跡西町浦地区における板碑移動に伴う確認調査である。平成17年2月初め頃、集合住宅建築に先立って、予定地内に立つ板碑を移動する計画を知った。集合住宅については埋蔵文化財に影響を与えない工法で計画されていたが、同碑は地権者宅の南側に広がる敷地の南西部にあり、周囲に溝を巡らした区画の中に立っていることから、造立当初の状態を保っている可能性が考えられた。その地下遺構の有無を把握したい旨地権者に打診したところ、了解が得られたことから、急遽確認調査の実施に至ったものである。

この板碑は『多賀城市史4 考古資料』(1991)で初めて紹介されたもので、砂岩の自然石に「 (ケン)」の梵字一文字が刻まれている。規模は高さ92cm以上、幅44cm、厚さ50cmである。

調査は2月7日に実施した。板碑に接して東西0.8m、南北0.5mの調査区を設定し、約35cmの深さまで掘り下げてその設置状況を確認し、写真撮影及び簡易的な記録を作成して調査を終了した。



第1図 調査区位置図

2. 調査成果

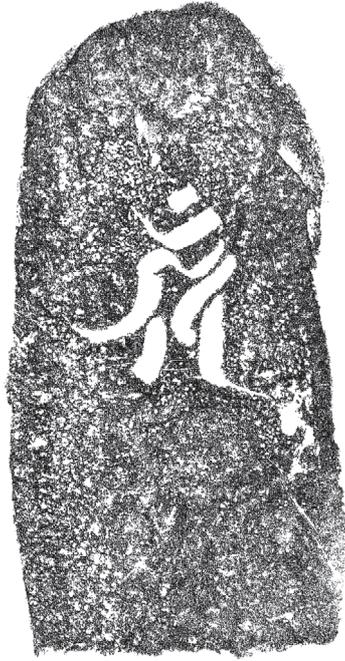
板碑は現地表から約20cmの深さでその底部が現れ、その背面には板碑を支えるように人頭大よりやや大き目の石があった。これらは現在の表土中に埋め込まれたものであり、造立当初の状態は保っていないことが判明した。

なお、「」の示す主尊について『多賀城市史4 考古資料』(多賀城市 1991)では「ケン(荒神)」としているが、同様の種子を主



昭和36年当時の調査地周辺 (国土地理院発行)

尊とする板碑の検討から、胎藏界大日真言や五大種子の省略形とする見解がある（中村光一「宮城県石巻地方における特殊種子板碑—所謂「」種子板碑について—」『あをな』第1号 1983）。



第2図 板碑拓本



調査風景



埋設状況

IV. 市川橋遺跡第49次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、多賀城市城南土地区画整理事業地内における開発計画に伴う確認調査である。当該地は、北を東北本線、南を市道新田上野線、東を都市計画道路清水沢多賀城線、西を多賀城市立城南小学校に画される区域である。平成10年10月に城南土地区画整理事業に伴い、3箇所にトレンチを設定して確認調査を実施したところ、いずれも亜泥炭層（スクモ層）の厚い堆積が確認され、一帯は湿地であったと判断された。なお、この調査の際に掘削が可能であった深さは、地表面から約1.5m下までであった。

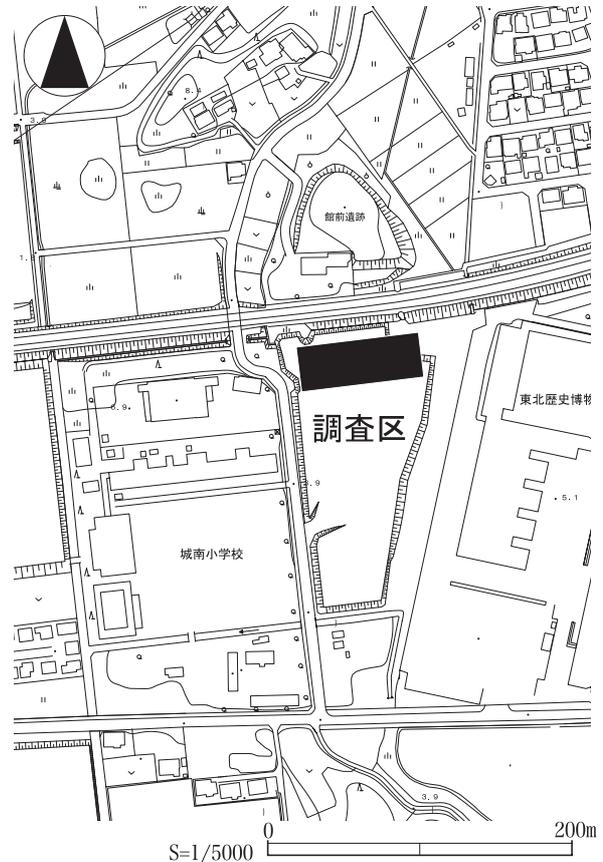
今回、当該地が一般住宅地域からマンション等の大型建物による住宅地域に変更になったことから、本市教育部文化財課において将来の開発時における取り扱い方法を再確認する必要性が生じた。そのため、平成16年4月に宮城県教育庁文化財保護課と、平成10年度の調査結果をもとにして協議を行った。その結果、東北本線を隔てて北側に所在する特別史跡館前遺跡の関連遺構等の存在を確認する必要から、以前の調査の際にはトレンチの設定地から外れた北端区域についてのみ、今後の開発の際には確認調査を実施すべきであるとの回答を得た。これにより、今回の確認調査を実施するに至ったものである。

調査は、平成16年7月28日に実施した。調査においては、対象地内の東側と西側の2箇所にトレンチを設定して、重機による掘り下げを行った。両トレンチとも現地表面から約4m掘り下げた段階でも、遺構面は確認されなかった。また、この段階で湧水が激しくなりトレンチの壁の崩落も始まったことから、それ以上の掘り下げは行わなかった。調査は、土層の堆積状況を確認し、その略図作成及び写真撮影を行って終了した。

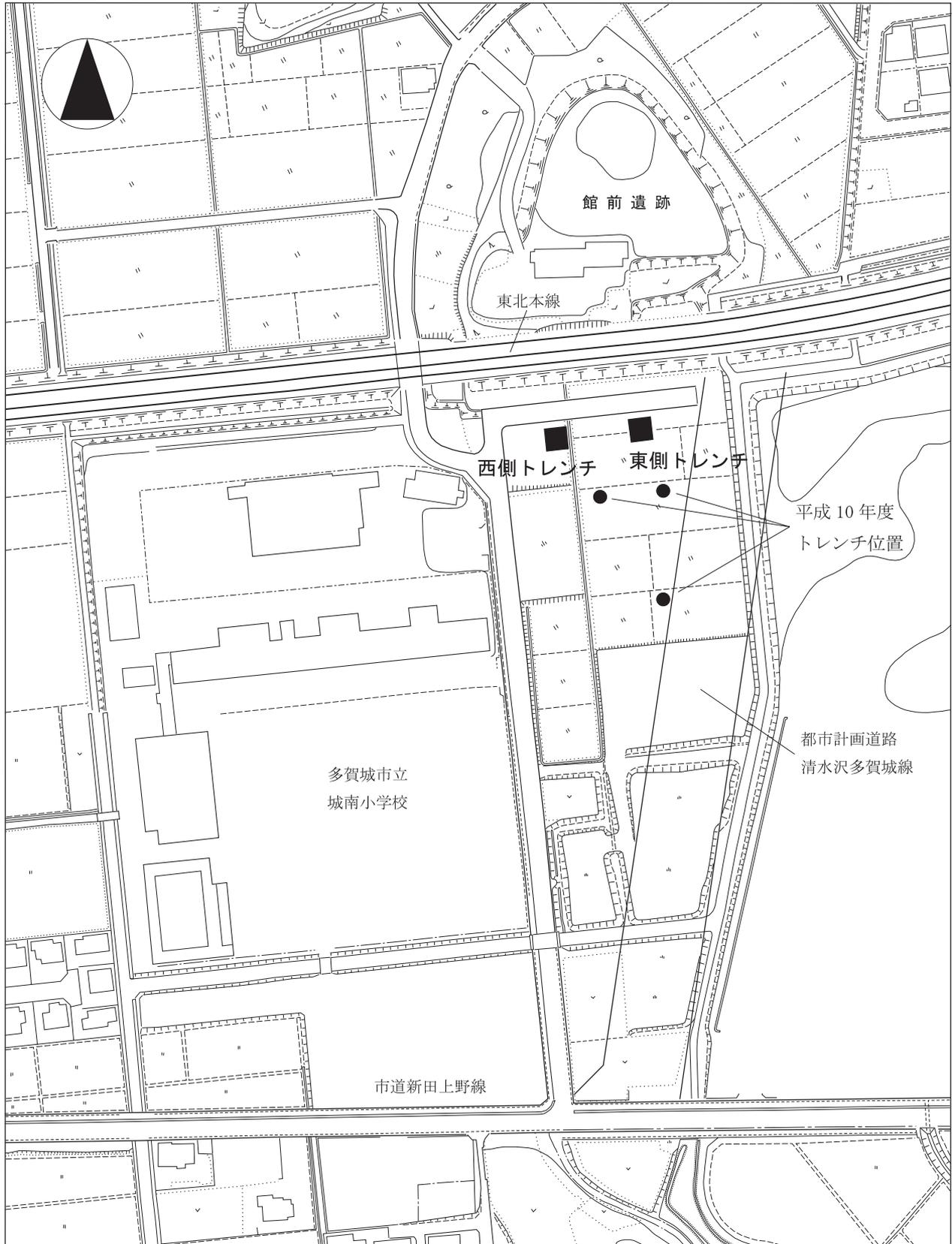
2. 調査成果

調査の結果、遺構、遺物とも確認されなかった。

トレンチ壁面の土層堆積状況を見ると、西側トレンチでは、区画整理事業における盛土の厚さが約220cm、その下が旧水田耕作土で厚さ約40cmである。続いて「スクモ」と呼ばれる植物遺存体を多量に含む亜泥炭層が堆積し、その厚さは約70cmである。この土層は2層に分けられ、下層には10世紀前葉に降下した灰白色火山灰が斑状及びブロック状に含まれる。亜泥炭層の下は、植物遺存体を含む暗灰色粘質土で厚さ約60cm、さらにその下には青灰色砂が堆積している。一方、東側トレンチでも土層の堆積状況のあり



第1図 調査区位置図



西側トレンチ座標値(北西隅) : (X=-188,957.525、Y=14,233.379)

東側トレンチ座標値(北西隅) : (X=-188,953.720、Y=14,262.788)

S=1/2000 0 100 m

第2図 トレンチ配置図

方は西側トレンチとほぼ同様であった。厚さ約230cmの盛土と厚さ約30cmの旧水田耕作土の下に亜泥炭層が堆積し、この土層中に西側と同レベルの旧地表面から約70cm下で灰白色火山灰が認められる。亜泥炭層の厚さは西側と同じく約70cmである。その下層には、植物遺存体を含む暗灰色粘質土と青灰色砂が互層に堆積している。厚さは70cm以上である。

3. まとめ

調査地は、平成10年度に確認調査を行った南側区域と同様に湿地が広がる一帯に含まれ、遺構は存在しないと判断される。

西側トレンチ



東側トレンチ



第3図 層序模式図



西側トレンチ掘り下げ状況 南西より



西側トレンチ土層堆積状況 西より

V. 新田遺跡第31次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴う確認調査である。平成16年11月に地権者より当該区における宅地造成計画の提示があり、これを受けて本市教育部文化財課と埋蔵文化財のかかわりについて協議がなされた。計画では、基礎工事に地盤改良杭を地下8mまで打ち込む工法をとることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。当該区の周辺では、北西の隣接地において第30次調査を実施していたが、遺構、遺物とも発見されていなかった（註）。このため、当該物件の協議申請に伴い、事前に確認調査を実施し、遺構、遺物の有無の確認を行うことになった。

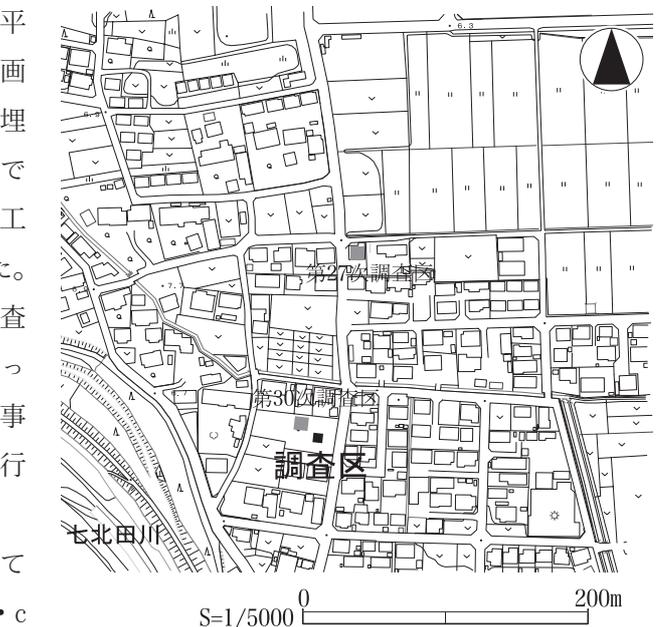
調査は11月29日に実施し、はじめに重機を使用して造成時の盛土（I a層）・現代の畑耕作土層（I b・c層）の除去を行った。続いてII層～V層及び一部IX層（現地表下約2m）まで掘り下げたが、各層上面で遺構・遺物は発見されなかった。なお、II a上面で検出した南北溝は、遺物は出土しなかったが、層序と土相からみて近・現代のものと考えられた。同日、調査区の全景写真及び平面図・南壁土層断面図を作成する。重機による調査区の埋め戻しを行い、一切の調査を終了した。

（註）但し、土壌分析を実施したところ、IX～XI層から高い密度でプラントオパールが検出された。層位から判断して古墳時代前期の水田耕作土と推定された。

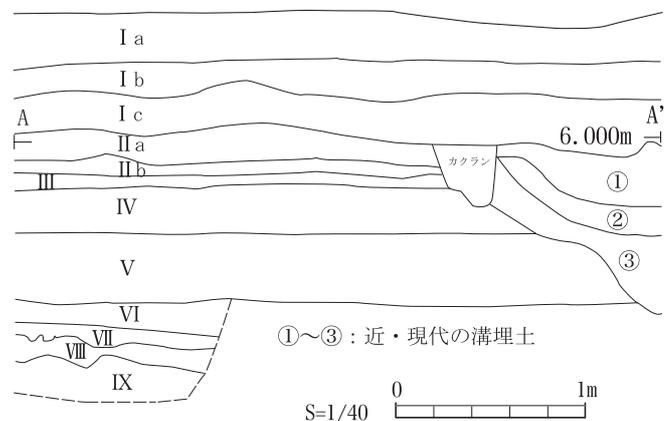
2. 層 序

今回の調査区で確認された層序は以下のとおりである。いずれの層もほぼ水平に堆積している。

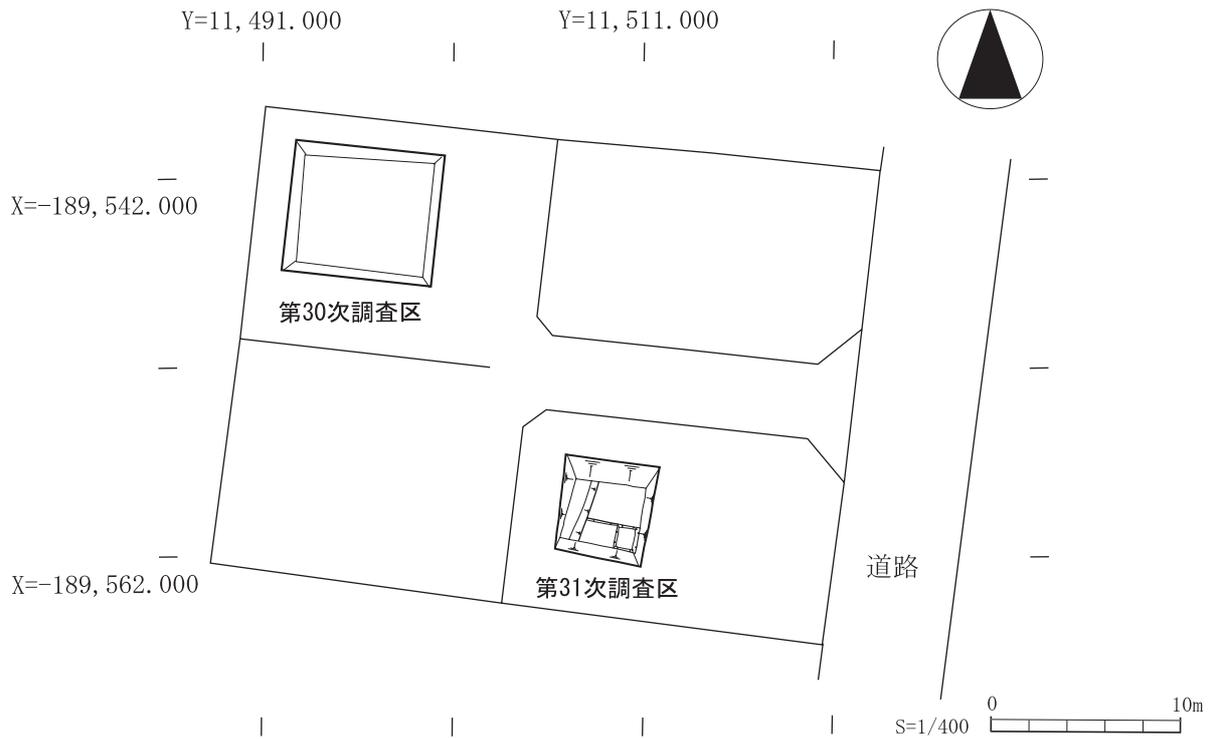
- I a層：宅地造成に伴う盛土層（灰オリーブ色砂）で、厚さは20～25cm。
 - I b層：現代の畑耕作土層（灰色砂質土）で、厚さは10～20cm。
 - I c層：現代の畑耕作土層（にぶい黄褐色砂質土）で、厚さは15～30cm。
 - II a層：近・現代の畑耕作土層（にぶい黄褐色砂質土）で、厚さは10～20cm。
 - II b層：近・現代の畑耕作土層（灰黄褐色砂質土）で、厚さは5～10cm。
 - III層：褐灰色砂質土で、厚さは5cm前後。第30次調査区の第III層対応。
 - IV層：浅黄色砂質土で、厚さは25cm前後。中世もしくは古代の基盤層
 - V層：黄灰色砂質土で、厚さは35cm前後。
 - VI層：灰白色砂質土で、厚さは10～20cm。
 - VII層：灰色粘質土で、厚さは5～10cm。下面に乱れあり。
 - VIII層：灰色粘土で、厚さは5～10cm。下面に乱れあり。古墳時代の土層。第30次調査区の第IX層対応。
 - IX層：灰色粘土で、厚さは25cm以上。第30次調査区の第X層対応。
- * IV層～VII層は、第30次調査区の第IV～VII層対応。



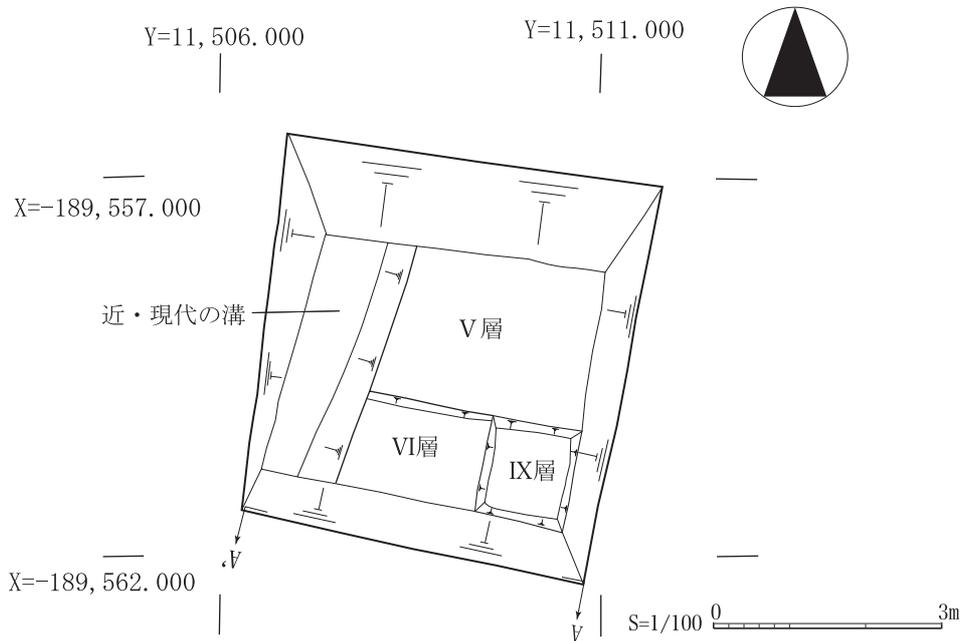
第1図 調査区位置図



第2図 調査区断面図



第3図 第30・31次調査区配置図



第4図 調査区平面図

3. ま と め

- (1) 今回の調査区では、北西に隣接する第30次調査区とほぼ同様な層序を確認した。
- (2) 古代～中世の遺構、遺物は発見されなかったが、第30次調査区との層序対応関係からみて、古墳時代前期の水田耕作土と考えられる土層（Ⅷ・Ⅸ層）を確認した。

VI. 高崎遺跡第45次調査

1. 調査に至る経緯と調査概要

本調査は、墓地擁壁設置工事に伴う確認調査である。平成16年4月に宗教法人化度寺より当該区における擁壁設置工事計画の提示があり、これを受けて本市教育部文化財課と埋蔵文化財のかかわりについて協議がなされた。計画では、L型擁壁を設置するため、現表土から最深80cmの基礎掘削を伴うことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。当該区の周辺では、遺構検出面までの深さ等について不明であったため、当該物件の協議申請に伴い、事前に確認調査を実施し、遺構・遺物の有無の確認を行うことになった。

調査は5月19日に実施し、東西方向に長い1.5m×5.5mのトレンチを設定した。はじめ

に重機を使用して表土（Ⅰ層）の除去を行った。続いて凝灰岩崩壊土層（Ⅱa層）上面で精査を行ったが、調査区の北半分は深さ1mほど掘削されており、地形の改変が著しいものとみられた。遺構・遺物はまったく発見されなかった。さらに調査区東端を深掘りしてみたところ、亜炭層（Ⅱb層）→岩盤層（Ⅱc層）の層序が確認され、Ⅱ層以下は当該地の基盤層と考えられた。同日、調査区の写真撮影及び略測図を作成した後、重機で調査区の埋め戻しを行い、一切の調査を終了した。



第1図 調査区位置図

Ⅰ層	表土 約40cm～1m
Ⅱa層	凝灰岩崩壊土層 約30cm
Ⅱb層	亜炭層 約30cm
Ⅱc層	岩盤層

第2図 層序模式図



調査区東半部と土層堆積状況 東より

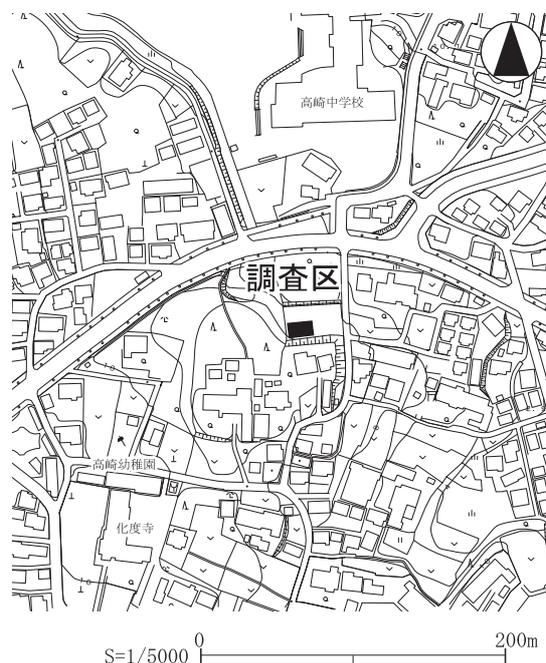
VII. 高崎遺跡第46次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、高崎遺跡井戸尻地区における個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成16年10月8日、地権者より当該区における住宅建築と埋蔵文化財の関わりについて協議書



調査区全景 西より



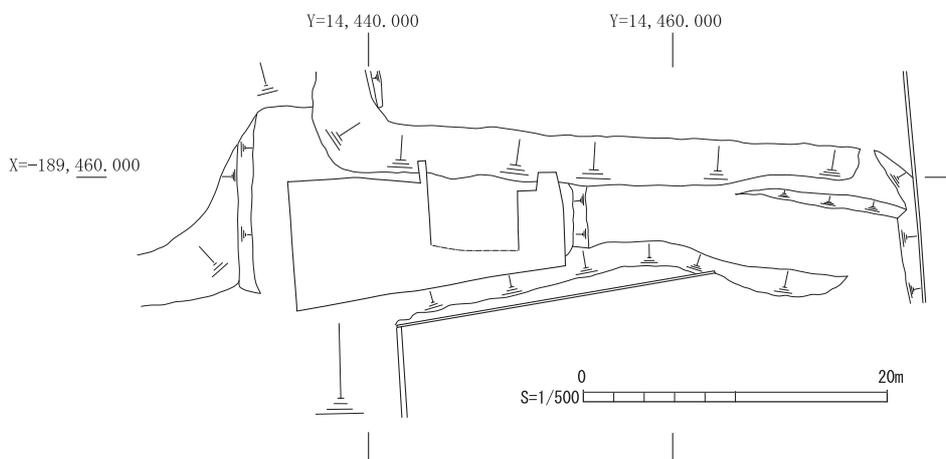
第1図 調査区位置図

が提出された。建築予定地は丘陵北斜面であり、基礎工事の際には建物部分を中心に1～1.25m切り土する計画であったことから地下の遺構への影響が懸念された。ただし、当該区は地表面に顕著な凹凸が確認でき、北側の裾部は既に切り落とされているなど、全体的に地形が大きく改変されている可能性が考えられた。そこで、確認調査を実施して遺構の有無を確認することが必要と考え、今回の調査の実施に至ったものである。

調査は11月10日より開始した。重機によって表土の除去を行い、地山上で遺構検出作業を行ったが遺構は発見できなかった。17日に全景写真を撮影し、22日に調査区平面図を作成してすべての調査を終了した。

2. 調査成果

土層は著しく攪乱され、旧表土は全く残存していなかった。削平は地山(岩盤)まで及んでおり、地形が大きく改変されていることが判明した。遺構は発見できず、遺物は古代の土師器杯、須恵器甕、瓦の小片が少量出土した。



第2図 調査区平面図

VIII. 桜井館跡第1次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、桜井館跡における水道工事配水管整備事業に伴う発掘調査である。平成16年6月18日、当市水道部より当該区における水道工事と埋蔵文化財の関わりについて協議書が提出された。対象地区は丘陵裾部であり、館跡の北端部にあたる。この地区は現在市道となっており、計画ではその南側に幅60cm、深さ87.5cmの敷設溝を全長約70mにわたって掘削するというものである。遺跡に与える影響は軽微であると考えられたが、地山まで掘り下げることが予想されたことから工事立会を行い、表土を除去した後に地山上面で遺構確認作業を実施するという方向で協議を行い、了解が得られた。

調査は7月28日に西半部、29日に東半部、8月5日に東端部（道路横断）と3回に分けて実施した。

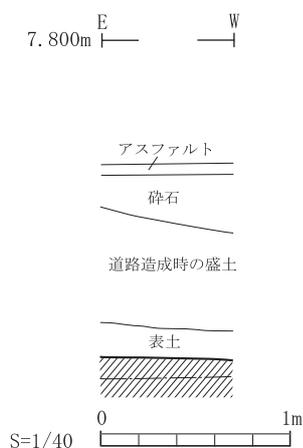
2. 調査成果

現地表下85～90cmの深さに市道造成前の表土（暗褐色砂質土）があり、その下は地山（褐色土）となっている。

遺構・遺物ともに発見できなかった。



第1図 調査区位置図



第2図 土層断面図



調査区全景 西より

引用・参考文献

- 山田一郎・庄子貞雄 1980 「宮城県に分布する灰白色火山灰について」『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1979』
- 町田洋 1987 「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』日本第四紀学会編
- 阿子島功・壇原徹 1991「東北地方，10C頃の降下火山灰について」『中川久夫教授退官記念地質学論文集』
- 多賀城跡調査研究所 1998 『多賀城跡調査研究所年報 1997』

報 告 書 抄 録

ふ り が な	たがじょうしないのいせき
書 名	多賀城市内の遺跡 1
副 書 名	平成16年度発掘調査報告書
シ リ ー ズ 名	多賀城市文化財調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第84集
編 著 者 名	千葉孝弥 島田 敬 相澤清利 鈴木孝行
編 集 機 関	多賀城市埋蔵文化財調査センター
所 在 地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27番1号 TEL022-368-0134
発 行 年 月 日	西暦2006年 3 月29日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さんおう 山王遺跡 第46次調査	たがじょうし さんおうあざさんおう 多賀城市山王字山王 よんく いちかわあざたがまえ 四区、市川字多賀前	042099	18013	38度 17分 38秒	140度 59分 11秒	20041206 ～ 20041214	53㎡	用排水路 整備工事
さんおう 山王遺跡 第48次調査	たがじょうし さんおうあざにしまち 多賀城市山王字西町 うら 浦82	042099	18013	38度 17分 47秒	140度 58分 26秒	20050207	1㎡	板碑の 移動
いちかわばし 市川橋遺跡 第49次調査	たがじょうし じょうなん 多賀城市城南一丁目	042099	18008	38度 17分 51秒	140度 59分 46秒	20040728	90㎡	遺構の分 布確認
にいだ 新田遺跡 第31次調査	たがじょうし にいだあざにし 多賀城市新田字西 2-11	042099	18012	38度 17分 32秒	140度 57分 53秒	20041129	25㎡	個人住宅 建設
たかさき 高崎遺跡 第45次調査	たがじょうし たかさき 多賀城市高崎二丁目6	042099	18018	38度 17分 31秒	140度 59分 47秒	20040519	8㎡	擁壁工事
たかさき 高崎遺跡 第46次調査	たがじょうし たかさき 多賀城市高崎二丁目 57-2	042099	18018	38度 17分 35秒	140度 59分 54秒	20041110 ～ 20041122	104㎡	個人住宅 建設
さくらい たてあと 桜井館跡 第1次調査	たがじょうし ちゅうおう 多賀城市中央一丁目	042099	18028	38度 17分 27秒	141度 00分 23秒	20040728 20040729 20040805	30㎡	配水管 整備

所収遺跡	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
さんおう 山王遺跡第46次調査	集 落 市	古代	溝・竪穴住居・ 柱穴・土壇	土師器・須恵器 須恵系土器	
さんおう 山王遺跡第48次調査	集 落 市	古代・中世	なし	なし	
いちかわばし 市川橋遺跡第49次調査	集 落 市	古代	湿地	なし	
にいだ 新田遺跡第31次調査	集 落	古墳時代	水田	なし	
たかさき 高崎遺跡第45次調査	集 落	古代・中世近世	なし	なし	
たかさき 高崎遺跡第46次調査	集 落 市	古墳時代・古代	なし	なし	
さくらい たてあと 桜井館跡第1次調査	城 館	中世	なし	なし	

多賀城市文化財調査報告書第84集

多賀城市内の遺跡 1

—平成16年度発掘調査報告書—

平成18年 3月29日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番1号
電話(022)368-0134

発行 多賀城市教育委員会
多賀城市中央二丁目1番1号
電話(022)368-1141

印刷 有限会社 工 陽 社
宮城県塩竈市尾島町8番7号
電話(022)365-1151
